

# 北の鉄道風景

Train number; 31D

2024.12.14 9:41

1/800, f/7.1, ISO 200, f=180mm, Daylight/Sunny

8256×5504 Raw

## 第131回

### 風花見<sup>かざはなみ</sup>

痛い、痺れる、息苦しい、などという言葉の次には若返りサブリの宣伝文句が続くのが定番になってしまった世界一の超高齢社会日本だが、まさに痛くて、痺れて、息苦しいなあ。氷点下十度。まだ温かい方。天候は曇り時々晴れ。ここにしては良い方。しかし、やって来てみると、私の目指すポイントは烈風にさらされて、雪も飛ばされて岩が露出していた。これは計算外である。



蒸気機関車は千変万化する湯気や煙を出してくれるので、瞬間の切り取りがいろいろある最高のモデルだった。函館本線上砂川支線 1975

ふっと風が止んだ瞬間、原生のパノラマがさあっと広がるのは見事としか言いようがないのだが、それもつかの間、また風花が舞い上がり、このお宝、そうやすやすと見せるものかと言わんばかりにみるみる白い巨人になって目の前に立ちはだかる。これじゃあ、まるで子供の頃の祭りに並んだ見世物小屋じゃないか。中の様子を少しだけ表から見えるようにして、いよいよのところで幕が降ろされ、「はい、この続きを見たいなら、入った、入った。お代はたったの百円だよ」となるやつ。百円は高かった。忘れていたそんな古い



写真と文＝眞船直樹

記憶を蘇らせるこの白いカーテンには怪しい魔性の気配さえ感じてしまう。

面倒だが防寒着の奥からスマホを取り出せば列車の位置を確認できるようになったのはいいが、通過五分前にはカメラを構えることになる。素手でシャッターを切りたい。顔も出したい。そんな私にはここからが地獄だ。ものの一分で感覚がおかしくなる。手が痛い。試し撮りをしてみるが指が少し痺れ始めているのがわかる。さらに風のパンチを喰らえば息ができなくなる。この間に列車が行ってしまえばおしまい。白い邪魔者が吹き飛んだ一瞬に列車の姿が見えれば大当たりだ。

そんな、賭けみたいなことしなくても、快晴無風の日撮影に行けばいい話じゃないかと人は言うが、それは違う。写真は時間を切り取ってこそ意味がある。風雪の合間に一瞬見せるこの表情がたまらない。風花が満開、まるで雲の上を走るような列車の姿は私の脳を痺れさせてやまないのだ。その直後、視界は真っ白になり、カメラも私も雪だるまになるのだが、こんな花見はやめられない。